

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870187

研究課題名(和文)中国大興安嶺における生業環境の変化とトナカイ飼養民の適応形態：1940-2010

研究課題名(英文)Changes in the Subsistence Environment and Adaptive Strategies of Reindeer Herding Peoples in Daxing'anling Forest Area, China, 1940-2010

## 研究代表者

卯田 宗平 (UDA, SHUHEI)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授

研究者番号：40605838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、中国大興安嶺の森林地帯でトナカイ飼育を続けるエヴェンキ族を対象に、彼らが現在でもトナカイ飼育ができる要因を明らかにするものである。彼らは、かつて狩猟、漁撈、交通手段としてのトナカイの飼育という、いわゆる「北方の三位一体」の生業活動をおこなっていた。しかし、2003年以降、彼らは地方政府による生態移民政策の影響で狩猟や漁撈を止め、トナカイ角の生産に専門化するようになった。こうしたなか、彼らは既往の技術を援用することでトナカイを飼育していることが分かった。彼らが既往技術で対応できたのは、郷政府からの支援があったからであり、その背景には郷政府が進める観光開発があるからである。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the Evenki reindeer herders in Daxinganlin Forest, and describes their adaptive strategies under a changing environment. They previously engaged in hunting, fishing, and reindeer husbandry. In 2003, the regional government required the Evenki to relocate to a suburb in Genhe City to improve their living standards. Following the 2003, they stopped hunting and fishing, and started producing soft reindeer antlers for the Chinese pharmaceutical market without changing their breeding technique. They were able to do this, using the old breeding technique, because the regional government provided various types of support. The regional government established an antler-processing factory, a shop, and a museum, and also provided technical assistance on reindeer breeding. Without this support, the Evenki would not have been able to produce soft antlers. This study clarifies that the cooperation of the regional government were important for the subsistence of the Evenki.

研究分野：環境民俗学

キーワード：地域研究 生態・環境 中国 環境変化 大興安嶺

### 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、自然・社会環境の変化と人間集団の適応形態のダイナミズムを理解し、複数の社会間でみられる普遍性やパターンを導き出すことを研究の目的としている。

研究代表者は、これまで中国長江中流域・江西省鄱陽湖で生きる鵜飼漁師たちを対象に、生業環境の変化と生計維持に関わる研究を続けてきた。その結果、漁師たちは中国の社会経済体制や自然環境の変化に運動するかたちで技術と規範を改変させながら漁を続けてきたことを明らかにした。研究代表者が鵜飼漁師を取り上げたのは、鵜飼漁がカワウという動物を漁獲手段とする特殊な漁法であり、技術革新によって漁のやり方を変えていくことが難しく、それゆえ彼らは環境変化の影響をもっともダイレクトに受けるからである。ただ、研究代表者が対象としたのは鵜飼漁師というひとつの生業集団である。そのため、漁師たちの事例が、同じ中国で同じように動物を飼育し生計を維持する集団のなかで何がどのように異なるのか分からない。

むろん、異なる生業を見比べる場合、比較の尺度や妥当性が問われることは承知している。しかし、それ以上に、生計維持のメカニズムに関する固有性と類似性を理解することは、地域間、村落間、生業間で格差が広がる中国において、その問題の理解と解決への知見を得るためにも重要であると考え。こうした背景を踏まえ、研究代表者は大興安嶺でトナカイを飼育しているエヴェンキ族らの生計維持のメカニズムを明らかにすることにした。

### 2. 研究の目的

本研究では、ツングース系の言語を話し、中国東北部の大興安嶺でトナカイ飼養を続けるエヴェンキ族らを対象に、新中国成立前から集団化の時代、改革開放を経て現在に至るまでの生業環境の変化と生計維持のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究の具体的な方法は以下の4点ある。

(1)エヴェンキ族らが住む村落においてフィールド調査を実施し、過去70年間の生活と生業の時代的な変化を定性的に記述する。また定量的な調査により世帯経済と健康状態を明らかにする。

(2)森林地帯に点在するトナカイキャンプ地においてトナカイの飼養技術を記述分析する。

(3)大興安嶺を撮影した衛星画像を解析し、森林環境の季節的・時代的な変化を定量的に捉える。

(4)地域間・生業間比較の視点から大興安嶺のトナカイ飼養民の生活・生業転換、飼養技術の類似性と固有性を導き出す。そして、最

後に現代的な課題と将来の予想される変化を考察する。

### 4. 研究成果

本研究では、大興安嶺でトナカイ飼養を続けるエヴェンキ族らを対象に、ポスト「北方の三位一体」時代ともいえる現代を生き抜くための飼養技術を検討するとともに、大興安嶺においてトナカイ飼養を可能とする背景要因を明らかにした。とくに、飼養技術の検討にあたっては、彼らが既往技術を援用しながら、いかにしてトナカイの生態に介入し、親和性を確立させているのかという点に注目した。そのうえで、エヴェンキ族らが既往技術の援用で新たな環境に適応できた理由を考察した。

以下では、調査地の概要とトナカイ飼養の現状をまとめたあと、現代社会を生き抜くためのトナカイ飼育の技術を明らかにする。そして、エヴェンキ族らが既往技術を援用することで対応できた要因について述べる。最後に本研究で明らかになったことをまとめる。

#### (1) 調査地の概要

調査対象地は内モンゴル自治区呼倫貝爾市根河市のA村である。A村がある根河市は北緯50度20分から50度30分、東経120度12分から122度55分に位置し、南北が240.4キロメートル、東西が198.8キロメートル、面積は約2万平方キロメートルである。

A村は根河市の中心部から4キロメートル離れた位置にある。この村には計59戸、162人が住む。この村にはエヴェンキ族が計107人(全体の66%)、それ以外の人びとが計55人住んでいる。29歳以下の人口は計58人であるが、そのなかでエヴェンキ族は48人(割合にして83%)である。とくに9歳以下の子どもはひとりを除いてすべてエヴェンキ族である。一方、その親世代といえる30歳から59歳までの人口は計85人であるが、そのなかでエヴェンキ族は47人(割合にして55%)である。

大興安嶺のエヴェンキ族らは定住や移住政策、集団化政策、天然林保護政策などの影響を大きく受けながら生活を営んできた。彼らは、1957年にアムール川周辺の奇乾村において定住生活を開始し、1965年には満歸鎮に移住した。その後、2003年に現在の根河市中心部に移住した。

#### (2) トナカイ飼養の現状

狩猟用の銃の所有が禁止された2003年以降、エヴェンキ族らは狩猟活動を終了せざるをえなくなった。狩猟活動の終了とともに、狩猟時の荷駄運搬用や騎乗用としてのトナカイもその役割を終えたかにみえた。しかし、彼らは今でもトナカイの飼養を続けている。

彼らがいまでもトナカイの飼養を続けるのはその角を採取するためである。中国では主に自然由来の産物からなり、体質の改善や体調の維持のために服用される薬を「中薬」と総称する。中国ではこの「中薬」の市場が

発達しており、トナカイの角にも「補精神(精力を増強する)」や「助腎臓(腎臓の機能を助ける)」「強筋健骨(筋肉や骨格を強く健康的なものにする)」といった効果があるとされる。そして、中国ではこうした薬効をもつとされるトナカイの角に高い商品価値がつく。こうした状況のなか、エヴェンキ族らはかつて駄獣や乗用獣であったトナカイを殺さず、毎年生え替わるトナカイの角を仲買人、観光客に販売することで生計を維持しているのである。

大興安嶺においてエヴェンキ族らが管理するトナカイは南モンゴルから北モンゴルおよびアルタイ山脈に分布するもので、シベリアの森林トナカイと呼ばれるものである。現在、大興安嶺にはトナカイキャンプ地が計8カ所ある。

キャンプ地でトナカイ飼養に従事するのは計29人(男性14人、女性15人)である。彼らの平均年齢は47歳である。最高齢はMLYSキャンプ地のMLYS氏(女性)で90歳である。最も若いものはMLYSキャンプ地のMR氏(男性)で20歳である。一般にキャンプ地の名称は、そこに滞在するメンバーのなかで最年長の女性の名前を使用する。

トナカイ飼養に従事している人たちの民族をみると、エヴェンキ族が21人、漢族が5人、モンゴル族が2人、オロチョン族が1人である。キャンプ地の構成員が最も多いのはDMLキャンプ地であり、その数は7人である。次いでMLYSキャンプ地で6人である。一方、DW、SS、BDX、YSH、SYLキャンプ地はそれぞれ2~3人である。構成員の多さはそこで飼育するトナカイの数の多さとも関係する。キャンプ地で飼養されているトナカイは計700~800頭であるが、最も多くトナカイを飼育しているのはMLYSキャンプ地である。その所有数は300~400頭である。次いでDMLキャンプ地が140頭前後を所有している。一方、トナカイ飼養に従事するものが少ないYSHやSSキャンプ地では所有数が20~30頭程度である。

トナカイ飼養に従事するものは郷政府が無償で提供するテントを利用できる。また、森林地帯に点在する各キャンプ地には敷地内に太陽光発電装置があり、それで得た電気テレビやラジオも使用できる。エヴェンキ族らはキャンプ地の周辺にトナカイのエサとなるトナカイゴケが少なくなるとキャンプ地を移動する。移動にはテントやベッド、テレビ、薪を燃料とする暖房器具などの運搬を伴う。そのため、かつて彼らはキャンプ地を移動する際、荷駄運搬用のトナカイを使用していた。現在、彼らは郷政府によって貸し出される大型トラックを使用している。

### (3)トナカイ飼養技術の解明

エヴェンキ族らは2003年に狩猟活動を止めてから角を採取するためだけにトナカイを飼育するようになった。彼らにとってトナカイは狩猟時の移動の手段から角を生産す

る対象になったのである。このようにトナカイの利用目的が「生業の手段」から「生業の対象」に変化するなかで彼らはどのような技術をもってトナカイを飼育し続けているのであろうか。

本研究では、ポスト「北方の三位一体」時代を生きるうえで重要だと考えられる二つの技術に注目する。その技術とは、仔トナカイへの人為的な介入、繁殖期に未去勢オスから仔トナカイを守る技術である。は馴化個体を増やすための働きかけであり、は角の商品価値を高めるための働きかけである。本研究ではこれら二つの技術を具体的に明らかにした。

#### 仔トナカイへの人為的な介入

エヴェンキ族らはトナカイの所有数を増やすことで角の採取量を増やしたいと考えている。とくに、彼らがborachaと呼ぶ馴化個体は角の採取の際に至近距離で接近する人間を恐れない。そのため、より多くのborachaをつくり、より効率よく角の採取作業を行いたいのである。彼らはトナカイを人間に馴らす作業をodachiと呼ぶ。仔トナカイと未馴化のまま成長した個体に対してこのodachi技術によって人間とのあいだに親和性を確立させるのである。以下では、仔トナカイへの介入の技術をまとめる。

仔トナカイへの介入は生後間もない時期に行われる。通常、人目につかないところで出産した母トナカイは、出産日から1~3日後に仔トナカイを連れてキャンプ地に戻ってくる。その際、エヴェンキ族らは手に塩をもち、それを舐めに来る母トナカイを捕まえ、木に繋留する。母トナカイはすでに人間とのあいだに親和性を確立しているため簡単に捕まえることができる。

その後、彼らは母トナカイのまわりにいる仔トナカイを捕まえようとする。しかし、人間に馴れていない仔トナカイは人間が少し接近するだけで遠くに逃げってしまう。彼らは6~7人が一組となり、両手を大きく広げて仔トナカイに近づき、逃げまわる仔トナカイを徐々に囲い込む。そして、仔トナカイを捕まえ、暴れる仔トナカイを男性数人で抑え込み、首紐(comatton)をつける。

彼らは捕まえた仔トナカイを母トナカイの近くに繋ぎ止め、授乳を自然に任せる。その後、母トナカイを放つ。母トナカイはやがてエサを探しに森林のなかに入るが、数時間もすると仔トナカイのところに戻ってくる。彼らは戻ってきた母トナカイを捕まえて仔トナカイの近くに繋ぎ止める。

そして、再び授乳を自然に任せ、仔トナカイを自由にさせる。その後、仔トナカイもエサを探しに森林のなかに入るが、数時間後には再び母トナカイの近くに戻ってくる。すると、彼らは6~7人が一組となり戻ってきた仔トナカイを再び捕まえる。そして、仔トナカイを母トナカイの近くに繋ぎ止め、再び母トナカイを放つ。

この期間、彼らは母子トナカイの紐帯を利用し、まずは人間とのあいだに親和性が確立されている母トナカイを捕まえる。そして、捕まえた母トナカイをおとりにし、母トナカイからは離れないが人間を怖がる仔トナカイを大勢で囲い込んで捕まえる作業を何度も繰り返す。彼らはトナカイの母子をそれぞれ捕まえては放つ作業を繰り返すことで仔トナカイに「人間に触れ得る親和性」を確立させるのである。

彼らはこの odachi 技術を「仔トナカイがおとなしくなるまで続ける」という。ここでいう「おとなしくなるまで」とは人間が至近距離で近づいても逃げず、片手で仔トナカイの腹を抱きかかえて持ち上げても暴れないようになるまでである。仔トナカイは何度も人間に捕まえられることで徐々に人間に馴れ、人間が近づいても忌避反応を示さないようになる。こうした行動特性は、もちろん野生のトナカイにはみられない。

この odachi 技術は生後 4~5 日目の仔トナカイに行くことが重要であるとされる。生後すぐの仔トナカイに人間が介入すると「仔トナカイに人間の匂いがついてしまい、母トナカイは人間の匂いがついたわが子への授乳を拒否するから」であるという。そのため、彼らは生後すぐの仔トナカイには odachi をしない。一方、生後 6~7 日を過ぎると仔トナカイは人間を避けて逃げる速度が速くなるため、仔トナカイを捕まえるのに手間がかかる。そのため、彼らは生後 4~5 日後の仔トナカイに odachi を行うのである。

未去勢オスから仔トナカイを守る

かつてエヴェンキ族らは所有するトナカイのなかで身体の大いなる数頭のオスを種オス (shieru) として残し、それ以外のすべてのオスを去勢していた。彼らがオスを去勢するのは、発情期 (9 月頃) を迎えると未去勢オスの気性が荒くなるからである。時には未去勢オス同士の衝突によって致命傷を受ける個体がいったり、人間に衝突したりする場合もある。一方、オスを去勢すると気性がおとなしくなり、より容易に扱える。そのため、彼らはほぼすべてのオスを去勢し、騎乗用や荷駄運搬用として利用していた。

エヴェンキ族らによるかつての去勢方法は男性数人がオスを倒して抑え込み、睾丸を潰す無血法であった。1980 年代初めからナイフで切り取る方法になった。彼らは去勢のことを otta と呼び、去勢オスを inikki と呼ぶ。

彼らはかつて去勢オスに生活用品を載せ、また老人や子供も乗せてキャンプ地を移動していた。1992 年以降、キャンプ地の移動にはトラックを利用するようになった。しかし、彼らは当時も狩猟時の荷駄運搬用として去勢オスを利用していただけ、引き続き所有するオスに去勢を施していた。

その後、彼らは 2003 年からオスへの去勢をすべて止めた。それは、根河市への移住と同時に狩猟活動ができなくなり、狩猟時の荷

駄運搬用としてトナカイを利用することがなくなったからである。オスへの去勢を止めた理由はほかにもある。それは、オスを去勢すると角の成長が遅くなり、角のサイズも小さくなる。そのため、角の採取と販売によって生活を営むようになった彼らは、より大きな角をより多く採取するためにオスへの去勢を止めたのである。

一般に、未去勢オスは発情期になると気性が荒くなり、群れとして管理することが難しい。そのため、動物の群れ管理で重要なのは所有するオスを去勢して扱いやすくすることである。ただ、現在のトナカイ飼養の場合、群れ管理を容易にするためにオスに去勢を施すと、その個体の角のサイズが小さくなり、角の商品価値が低下する。したがって、彼らは「発情期における群れ管理」と「角の商品価値の確保」とのあいだにある矛盾にどう対処するのかを悩んでいる。

現在、彼らはこの矛盾に対して以下のように対応している。それは、トナカイが発情期を迎える前に落葉針葉樹であるカラマツを切り倒し、それを組み合わせて大きな柵をつくる。そして、その柵のなかに仔トナカイを入れ、発情した未去勢オスから守るのである。彼らがつくる柵は直径約 30 メートル、高さ約 2 メートルの円形状のものである。

オスが発情期を迎えると、毎日、夜間に 2 歳以下の仔トナカイを柵のなかに入れる。夜間、母トナカイは柵の外に放ち、採食と交配を自由にさせる。早朝 6 時頃になると母トナカイは仔トナカイがいる柵の回りに戻ってくる。彼らは戻ってきた母トナカイを捕まえて柵のなかに入れ、母子の授乳を自然に任せる。その後、仔トナカイを柵の外に出す。仔トナカイはやがてエサを求めて森林のなかに入る。夕方になると仔トナカイは再び母トナカイのいる柵に戻ってくる。彼らは仔トナカイを捕まえて柵のなかに入れ、授乳を自然に任せたと母トナカイを柵の外に出す。この時期、彼らは母子トナカイをこのように飼育することで、発情して攻撃的になったオスから仔トナカイを守るのである。柵を使用した仔トナカイの管理は毎年 8 月末から 10 月初めまで行われる。

なお、彼らは 2013 年から柵のまわりに格子状の鉄線を張り巡らすようになった。これは鉄線を張ることで柵の強度を高め、未去勢オスによる衝突から柵自体を守るためである。

(4) トナカイ飼養を可能にする政府の支援

これまでエヴェンキ族らの技術的な対応についてみてきた。ただ、大興安嶺のトナカイ飼養は何も彼らの対応だけで維持されてきたわけではない。彼らがトナカイ飼養を続けられるのは郷政府の働きかけがあったからでもある。いうまでもないが、中国のトナカイ飼養は採取された角を購入する側が存在して初めて生業として成り立つ。つまり、トナカイ飼養では生業技術的な対応によっ

てトナカイの所有数を増やすだけでなく、角の買い手や市場との関係の確立も重要となる。

しかし、大興安嶺でトナカイ飼養に従事するエヴェンキ族らは、採取した角を加工したり、市場を新たに開拓したり、漢族を中心とした仲買人と交渉したりする時間や手段がないことが多い。そのため、郷政府は職員を大興安嶺に点在するキャンプ地に派遣し、角の採取を手伝い、採取量を記録し、角を加工施設まで運び込む作業を行ってきた。また、トナカイの販売経路の開拓も主導的に行った。加えて、2003年に根河市に移住した際、郷政府は角を乾燥させ商品化する加工施設も建設した。

また、エヴェンキ族らはキャンプ地周辺においてトナカイのエサとなるトナカイゴケが少なくなると生活の拠点を移動する。移動には煙突を備えたテントや鉄製のベッド、太陽光発電装置、薪を燃料とする暖房器具のほか、日常生活用品などの運搬を伴う。移動には多大な労力が必要となる。こうしたなか、郷政府は山中を移動する彼らに大型トラックを貸し出し、移動をより円滑に行えるようにしている。このほか、郷政府は限られた集団内で交配を続けることによるトナカイの近交退化を回避するためにロシアから新たな種オスを導入したこともある。

こうした郷政府の働きかけに対して当初から「角の購入価格の設定が不透明である」や「販売の自由を認めてほしい」といった声もあったという。もちろん、郷政府による一方的な政策の決定や実施には問題点もあったと考えられる。しかし、トナカイの角の採取から輸送、加工、販売に至るプロセスを政府主導で請け負ったことで、エヴェンキ族らは大興安嶺でトナカイ飼養に専念できたことも事実である。

郷政府がエヴェンキ族らを支援するには理由がある。それは、トナカイ飼養にかかわる観光開発を推し進めているからである。郷政府は、根河市に移住した際、エヴェンキ族らの歴史や生活を紹介する博物館を建設し、館内にはトナカイの角や大興安嶺の薬草を販売する店も併設した。そして、「中国唯一のトナカイ飼養の村」という宣伝文句で全国から観光客を呼び込もうとしているのである。

もともと、中国では中央から地方政府への財政支援が十分でないことが多い。そのため、地方政府は独自の財源を求めてさまざまな事業を展開することがある。本研究で取り上げた郷政府も1990年代よりトナカイの角の専売制を実施し、観光資源として重要なトナカイ飼養を支援することで観光事業を発展させ、独自の収益を得ようとしているのである。このように、ポスト「北方の三位一体」時代にエヴェンキ族らがトナカイ飼養で生活を営むことができたのは、その背後にトナカイをめぐって観光開発を推し進める郷政

府の存在があったからでもある。

#### (5)本研究のまとめ

大興安嶺において狩猟、漁撈、交通手段としてのトナカイの飼養という「北方の三位一体」の生業様式を長年続けてきたエヴェンキ族らは、2003年以降、トナカイの飼養のみで生計を維持するようになった。彼らがトナカイ飼養を続けるのは、簡単にいえばトナカイの角を採取し、それを販売するためである。つまり、エヴェンキ族らにとってのトナカイは荷駄運搬用や騎乗用としての「生業の手段」から、角を採取するための「生業の対象」に大きく変化したのである。

こうした変化のなか、彼らは新たな技術を導入したり、飼養技術を革新したりすることはなかった。むしろ、彼らは既往の飼養技術を援用することで引き続きトナカイを所有していた。本研究では彼らの技術的な対応の実際を明らかにした。

これに加えて、本研究では大興安嶺で生活をするエヴェンキ族らを支援し、角の商品化を積極的に行ってきた郷政府の役割も重要であり、その背景には郷政府がトナカイ飼養をめぐって観光開発を推し進めていることを指摘した。

今後は、トナカイの飼養技術の地域的な同質性と異質性、差異を生み出す背景を検討する必要がある。なぜなら、トナカイの馴化や飼養技術には、寒冷な気候や積雪、それに伴う農業生産の難しさといった環境のなかで各地の人びとが自らの生活をサスティナブルに営むための知恵が隠されていると考えるからである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

卯田宗平(2015)「ポスト「北方の三位一体」時代の中国エヴェンキ族の生業適応 - 大興安嶺におけるトナカイ飼養の事例」『アジアの生態危機と持続可能性 - フィールドからのサスティナビリティ論』アジア経済研究所研究双書616、pp.73-108、査読有。

卯田宗平(2015)「手段としての動物と人間とのかわり - 中国と日本の鵜飼漁の事例から」、『生態人類学ニュースレター』、第21号、pp.30-33、査読無。

卯田宗平(2014)「環境研究に“絶対解”はあるのか? - 共通理解に向けて」『アジアの環境研究入門 - 東京大学で学ぶ15講』(卯田宗平編、古田元夫監修)東京大学出版会、pp.1-16、査読無。

卯田宗平(2014)「カワウの追従性の獲得 - 中国の鵜飼漁におけるカワウと漁師との関係から」、『生態人類学ニュースレター』、第19号、pp.22-24、査読無。

卯田宗平(2013)「中国東北部・大興安嶺におけるトナカイ飼養の技法-エヴェンキ族



の生業とその背景-」『長期化する生態危機への社会対応とガバナンス研究報告』アジア経済研究所、pp.111-128、査読無。

〔学会発表〕(計 14 件)

卯田宗平、「手段」としての動物と人間とのかわり - 中国と日本の鵜飼漁の事例から」、第 20 回生態人類学会、秋田県仙北市田沢湖公民館(田沢湖総合開発センター)大集会室(秋田県・仙北市)、2015 年 3 月 26 日。

卯田宗平、「ウミウ誕生」の意味 - 人と動物との関係から考える」『ウミウの誕生からみる鵜飼の未来』シンポジウム(主催:公益社団法人宇治市観光協会、後援:京都府・京都市・宇治商工会議所)京都大学宇治おおばくプラザ・きはだホール(京都府・宇治市)、2015 年 2 月 28 日。

卯田宗平、「どの外来魚が資源か? 琵琶湖有害外来魚駆除事業をめぐる事例から考える」『東京大学アジア生物資源環境研究センター国際セミナー』東京大学中島董一郎記念ホール(弥生キャンパス・フードサイエンス棟(東京都・文京区))、2015 年 2 月 20 日。

卯田宗平、「生き方に「東アジア的」はあるのか? 東アジア概念を生態人類学の立場から考える」『東アジアの思惟する - 共通・差異・関係』東京大学東洋文化研究所・京都大学人文科学研究所・成均館大学東アジア学術院共同国際シンポジウム、成均館大学東アジア学術院(韓国・ソウル市)、2015 年 1 月 23 日。

卯田宗平、「飛ばねえカワウは、ただのカワウだ - 鵜飼漁から現代中国をみてみよう」第 14 回東京大学東洋文化研究所公開講座『アジアの眼』、東京大学東洋文化研究所(東京都・文京区)、2014 年 10 月 18 日。

卯田宗平、「自然生態回復事業难点解析-以日本琵琶湖外来魚事業为例」、東京大学 - 天津市合作研究項目<城乡融合和可持续发展>10 周年研讨会、天津津利华大酒店(中国天津市河西区)、2014 年 8 月 21 日。

卯田宗平、「“野生性”を保持する 家畜化と反家畜化のリバランス論をめぐって」、生き物文化誌学会第 12 回学術大会(東京大会)ミニシンポジウム、東京大学弥生講堂一条ホール(東京都・文京区)、2014 年 8 月 2 日。

卯田宗平、「人間と動物の関係論再考 中国の鵜飼漁における漁師とカワウの関係を手がかりに」、第 28 回東京大学大学院人類生態学研究会、東京大学大学院医学系研究科教育研究棟 13 階第 5 セミナー室(東京都・文京区)、2014 年 6 月 21 日。

卯田宗平、「そうだったのか! 中国の鵜飼い-小瀬鵜飼との対比から考える-」『長良川文化フォーラム』、主催:長良川伝統漁法保護事業実行委員会、関市教育委員会、岐

阜県関市わかくさ・プラザ総合福祉会館 3 階会議室(岐阜県・関市)、2013 年 12 月 14 日。

Shuhei UDA, "Current Status of Biodiversity Issues in Japan - Relation with Subsistence Culture." The UTokyo Forum 2103 in Sao Paulo, Brasil, Universidade de São Paulo (Brazil・Sao Paulo), November 09, 2013.

Shuhei UDA, "What kind of cultural difference were you surprised by at river? --the case of Cormorant fishing in China and Japan." The River Culture Forum 2013 in Hwachen, (Korea・Hwachen city), October 17, 2013.

卯田宗平、「鵜飼いからみた中国と日本-技術・自然環境・食文化-」第 7 回岐阜市市民講座、長良川うかいミュージアム(岐阜県・岐阜市)、2013 年 10 月 5 日。

卯田宗平、「若いカワウを飼い慣らすテクニク-中国の鵜飼漁の事例から-」日本鳥学会 2013 年度大会、名城大学天白キャンパス(愛知県・名古屋市)、2013 年 9 月 13 日。

卯田宗平、「鵜飼漁のカワウを飼い慣らす技法-中国の鵜飼漁におけるカワウと漁師との関係-」、生き物文化誌学会第 11 回学術大会、星薬科大学(東京都・品川区)、2013 年 7 月 9 日。

〔図書〕(計 2 件)

卯田宗平、『鵜飼いと現代中国 - 人と動物、国家のエスノグラフィ』、東京大学出版会、全 375 頁、2014 年 10 月。

卯田宗平編、『アジアの環境研究入門 - 東京大学で学ぶ 15 講』(古田元夫監修) 全 294 頁、2014 年 7 月。

〔その他〕

ホームページ等

所属機関のページ

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/organization/staff/uda/index>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授

卯田 宗平 (UDA SHUHEI)

研究者番号: 40605838

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: